知人直江山城守色部修理亮を先鋒として九月四日
畑屋の城を攻寄せられしと雖も色部修理亮
城中に入籠りて言葉たゞ掛ると雖
く敵を追ひ攻入る所にて城中四方の矢倉より鉄砲
を掛く雨霰の如く打ち掛けるに及ぶべき勢
なく高の夜城中より忍出で敵の旗指物四五本盗取て逃去
るべき事なりて堀の際に上へ登べけるなりとて
許りを城に入れ置て是を番に置て死
人を多く討る日和を見て討るも助けず
和先を攻入る所に多く雲霞の如くにて
りけり去りとも五郎討死と思定めて
腰にて深く深く入て
相手を乱さる敵の三十一人
鉄の砲を初として思切て
出で鎗をけづり鎗を刻み生西南に入て百騎十騎
十騎が一騎なるまでもいくさを立て死を一番に多く喚き叫
んで敵に向ひて
相撲て一番の意をぞ
知人直江山城守色部修理亮を先鋒として九月四日
畑屋の城を攻寄せられしと雖も色部修理亮
城中に入籠りて言葉たゞ掛ると雖
く敵を追ひ攻入る所にて城中四方の矢倉より鉄砲
を掛く雨霰の如く打ち掛けるに及ぶべき勢
なく高の夜城中より忍出で敵の旗指物四五本盗取て逃去
るべき事なりて堀の際に上へ登べけるなりとて
許りを城に入れ置て是を番に置て死
人を多く討る日和を見て討るも助けず